

フタバガキ科種子食昆虫群集

中川弥智子（京大生態研）・市岡孝朗（名大・農）・中静透（地球研）

ランビル国立公園の森を含めた東南アジア熱帯雨林に特有である一斉開花現象の究極要因を説明する重要な仮説はいくつかあるが、捕食者飽食仮説はそのうちのひとつである。これまでの研究では、種子捕食者として主に林床での哺乳類が重要視されてきたが、最近の研究により昆虫の重要性も指摘されてきた。また、この仮説の検証を行うには、同調して結実するフタバガキ科樹種間で共通の種子食昆虫がいるか等の、基礎データが不可欠である。さらに、一斉開花に伴って大きく変動する資源を、誰がどのように利用するのも興味深い問題である。そこで本研究では、フタバガキ科種子を食べる昆虫群集に注目して研究を行ってきた。このワークショップでは、以下の3項目について研究の内容とその（途中）結果を発表する。

1) 林冠袋がけ実験

種子捕食者として昆虫が本当に重要であるかを直接調べるため、林冠にて2種類の袋（布；全て排除、金網；小動物のみ排除）を用いた実験を *D.aromatica* で行った結果、林冠では小動物より昆虫のほうが種子捕食者として効いていることが示唆された。

2) フタバガキ科種子食昆虫群集

1996年、1998年の一斉開花で、3属24種のフタバガキ科種子食昆虫を調べたところ、合計52種が認められ、主にゾウムシ、キクイムシ、小型のガであることが分かった。また年によってその構成が大きく変わることで、両年から出てきた種子食昆虫でもその資源利用パターンが変化することなども明らかになった。現在2001年の一斉開花由来の種子食昆虫を同定中である。

3) フタバガキ科種子食昆虫群集とそのホストの関係

フタバガキ科種子食昆虫とそのホスト（種子）との関係はどのように決まっているのだろうか？この疑問を明らかにするため、フタバガキ科種子の成分分析を行っている最中である。今回はその途中結果を報告する。